

母性看護学実習における男子学生の思い

贄 育子¹⁾・小幡 孝志²⁾・室津 史子³⁾

抄 録

【目的】母性看護学実習に対する男子学生の思いを明らかにし、実習展開の示唆を得る。

【方法】母性看護学実習を終了した男子学生9名を対象とし、半構造化面接により作成した逐語録を、テキストマイニングで分析した。

【結果】補完類似度を用いた特徴表現抽出の結果、実習前は「男性-疎外感」、「実習-行く+したくない」、実習中は「新生児-看護」、「つながり-理解+できる」、「学生-必要」、「看護-経験+できる」、「観察-重要」、実習後は「まじめ-実習+したい」、「育児休暇-取る+したい」、「実習前-意味+ない」、「精神的サポート-必要」、「男性-支える」、「視点-増える」が抽出された。

【結論】母性看護学実習に対して男子学生は、実習前は性差による疎外感から不安を抱えている。しかし、実習中は対象者とのかかわりを通して、学生にとって必要な経験ととらえ、実習後は父親としての将来像についても考えていることがわかった。

キーワード：母性看護学実習、男子学生、思い、テキストマイニング

I. 緒言

A大学では「母性看護学」を「発達看護学-リプロダクティブ・ヘルスと看護-」という科目名のもと、性と生殖に関する健康と位置付け、次世代を育む過程にある母子ならびにその家族を広くとらえて学修する。臨地実習では、受け持ちケースの看護過程を展開し、妊娠・分娩・産褥各期の女性と新生児の生理的变化を基に、ウェルネスの視点でマタニティサイクルにある対象の健康課題をとらえ、健康の保持増進と正常からの逸脱予防のための看護を学修する。

しかし、産科医不足による産科病棟の閉鎖から、クリニックでの実習が多くなる中、クリニックにおける男子学生の実習受入れは難しく、A大学では平成24年度の母性看護学実習は、女子学生は2週間の病棟実習を行ったが、男子学生は1週間の病棟実習と地域のオープンスペースで実施されている子育て支援センター、外来実習(パパママ教室)を1週間とした。

平成22年の男性看護師は53,748人で全看護師の5.6%¹⁾、平成23年4月付の4年制看護大学における男子学生の入学者は1,803人と4年制看護大学の全入学者の10.3%となっている²⁾。A大学の平成25年度入学の男子学生は

22.1%と全国平均に比べて高い。そのため、母性看護学実習における男子学生の実習施設の確保とその展開方法が課題となっている。

男子学生の母性看護学実習に対しては、女性の世界に入っていくことを基盤とした男子学生特有のストレスサーが報告されている³⁾。また、妊産褥婦に抱く性差から抵抗感や劣等感を抱え、実習に消極的になる男子学生が多い⁴⁾ともいわれている。慣れない実習環境は学生の緊張を高めると考えられることから、複数の施設で実習を行うことが、男子学生の母性看護学実習に対する消極性をさらに増強している可能性も考えられる。

そこで本研究では、母性看護学実習終了後の男子学生に実習を振り返っての感想や印象についてインタビューを行い、母性看護学実習に対する男子学生の思いを明らかにした。その結果から、今後の男子学生の母性看護学実習の展開方法に対する示唆を得る。

II. 研究方法

1. 調査期間

平成25年5月～平成25年6月。

2. データ収集方法

1) 調査対象

平成24年度に母性看護学実習を終了したA大学男子学生の18名のうち調査協力の同意を得られた9名。

1) Ikuko Nie 広島都市学園大学健康科学部看護学科
2) Takashi Obata 〃
3) Fumiko Murotsu 〃

2) 調査方法

落ち着いて話せる部屋で、母性看護学実習の病棟実習、子育て支援センター実習、パパママ教室実習、それぞれに対する実習前のイメージ、実習中感じたこと、実習後の思いについて30～40分程度の半構造化面接を行い、内容は承諾を得て録音した。

3. 分析方法

本研究では作成した逐語録をText Mining Studio 4.2を用いて分析した。「情報理論によることばの分析」と言われているテキストマイニングは、形態素解析という、単語の活用を考慮しつつ最小の意味単位に分割する段階（分かち書き）と、形態素から大きなクロス表に書かれた数字を処理する段階（解析）の2段階のメカニズムからなっている。抽象的な、直感的な経験を操作可能な尺度や基準など、測定可能な測度に変更するため、分析者の恣意によって偏らない結果を抽出し、分析の方向を決めることができる。また、日本語の特徴を考慮した本ソフトは、認知言語学の知見と融合することでメタファーの解明も企図している⁵⁾ため、母性看護学実習に対する感想や印象といった学生の思いを客観的に分析することができると考えた。

〈頻度分析〉

使われている単語を探索するため、頻度分析の中の名詞・動詞・形容詞の上位10件の出現回数をカウントする単語頻度解析を行った。これによって、全体の単語頻度と、各実習における実習前、実習中、実習後の単語頻度を比較して検討することができる。

〈特徴分析〉

単語頻度解析では、出現頻度が多くなく上位に現れない重要な単語を見落とす可能性もあるため、補完類似度を用いて特徴分析を行った。言語の出現頻度に大きな違いがある場合、すなわち、特定の単語の出現頻度と全ての単語の出現頻度との差が大きい場合、 χ^2 検定よりも補完類似度が有効となる⁶⁾。補完類似度を指標値とした特徴語抽出と特徴表現抽出により、各実習の実習前、実習中、実習後に特徴的に出現する単語および係り受け表現を検討した。

〈注目分析〉

最低信頼度60%、共起出現回数2回以上のものを抽出する注目分析を行い、出現頻度の高い単語に注目し、その単語の表現や共起を検討した。

〈話題分析〉

話題分析の中でことばを介した属性の分布をみる対応バブル分析を行った。対応バブル分析は、2種類のカテ

ゴリ変数の頻度行列（クロス表）から、各カテゴリにスコアを与えることにより、カテゴリ変数を数量へと変換する。カテゴリから変換されたスコアを用いてデータを2次元上に配置すると、関連のあるカテゴリは近い点に配置される。この結果から、各実習の実習前、実習中、実習後と単語の関連性と、各属性間の距離から意見の近い属性と意見が異なる属性を検討した。

4. 倫理的配慮

研究の目的や意義、匿名であること、データの守秘管理、回答により不利益を被らないこと、途中辞退も可能であることを口頭及び書面にて説明し、同意を得て面接を実施した。そして、面接は、室外から面接風景が見えず、施錠できる場所で行った。

また、本研究はA大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号 第1303号）。

5. A大学における母性看護学実習

1) 母性看護学実習の目的・目標

目的：女性の特性とヘルスケアニーズを理解し、リプロダクティブ・ヘルスの視点から必要な援助ができる基礎的能力を養う。また、特にマタニティサイクルにある対象および家族へ、適切な援助ができるための基本的な実践能力を養う。

- 目標：①妊産褥婦および新生児の特徴を理解し、根拠に基づいた看護が実践できる。
②対象の多様な価値観を意識し、意思決定を尊重した看護が実践できる。
③妊産褥婦および新生児の看護を通じて、チームの一員として看護の立場から行動できる。
④対象の看護を通じて家族や親子の絆に触れ、自己の母性・父性観を発展させる。
⑤人間的成長や看護実践を発展させるために、自己の看護を振り返り考察できる。

2) 実習方法

2～6名の学生を1グループとして、男子学生は1週間の病棟実習、地域のオープンスペースで実施されている子育て支援センター実習と外来実習（パパママ教室）を1週間行った。

3) 指導体制

グループごとに1名の教員が担当し、実習指導を行うが、子育て支援センター実習については教員の引率はなく、男子学生のみで実習に参加した。

Ⅲ. 結果

1. 病棟実習

単語頻度解析の結果、実習前は「男性」、「女性」、「病棟」、「母親」、実習中は「褥婦」、「受け持つ」、「男性」、「実習」、「新生児」、「対象者」、実習後は「違う」、「機会」、「父親」、「経験+できる」等が抽出された(図1)。

補完類似度を用いた特徴語抽出では、単語頻度解析では抽出されなかった「不安」が実習前で抽出され、実習中は「優しい」、「受け持つ+できない」、実習後は「役立つ」が抽出された(表1)。特徴表現抽出では、実習前は「援助-不安」、「学習以前-入る」、「女性-嫌」、「不安-大きい」、「男性-かかわる+できない」、実習中は「褥婦-受け持つ」、「褥婦-受け持つ+できない」、「実習-行く」、「対象者-優しい」、実習後は「状態-退院」、「やりがい-必要」、「経験-役立つ」、「機会-良い」、「実習-比べる」、「高齢者-違う」が抽出された(表2)。また、病棟実習全般における、注目語表現では「女性-病棟」、「褥婦-受け持つ」、「受け持つ-できない」が抽出された。

2. 子育て支援センター実習

単語頻度解析の結果、実習前は「わかる+ない」、「地

域」、「コミュニケーション」、「つながり」、「引率+ない」、「家族」、実習中は「母親」、「職員」、「参加者」、実習後は「母親」、「必要」、「父親」等が抽出された(図2)。

補完類似度を用いた特徴語抽出では、実習前と実習後は単語頻度解析と同様の単語が抽出され、実習中は単語頻度解析では抽出されなかった「育児」、「疑問」、「多様」、「理解+できる」が抽出された(表1)。特徴表現抽出では、実習前は「コミュニケーション-とれる?」、「引率+ない-不安」、「学生-不安」、「雰囲気-わからない」、実習中は「疑問-感じる」、「疑問点-話す」、「母親-多い」、実習後は「孤立+しやすい-子育て中」、「育児ノイローゼ-可能性」、「育児参加-必要」、「子育て支援センター-必要」、「子育て-支える」、「職員-見守る」が抽出された(表2)。

3. パパママ教室実習

単語頻度解析の結果、実習前は「父親」、「いる」、「母親」、実習中は「父親」、「参加」、「いる+ない」、実習後は「父親」、「母親」、「参加+したい」等が抽出された(図3)。

補完類似度を用いた特徴語抽出では、実習前は単語頻度解析と同様の単語が抽出され、実習中は単語頻度解析

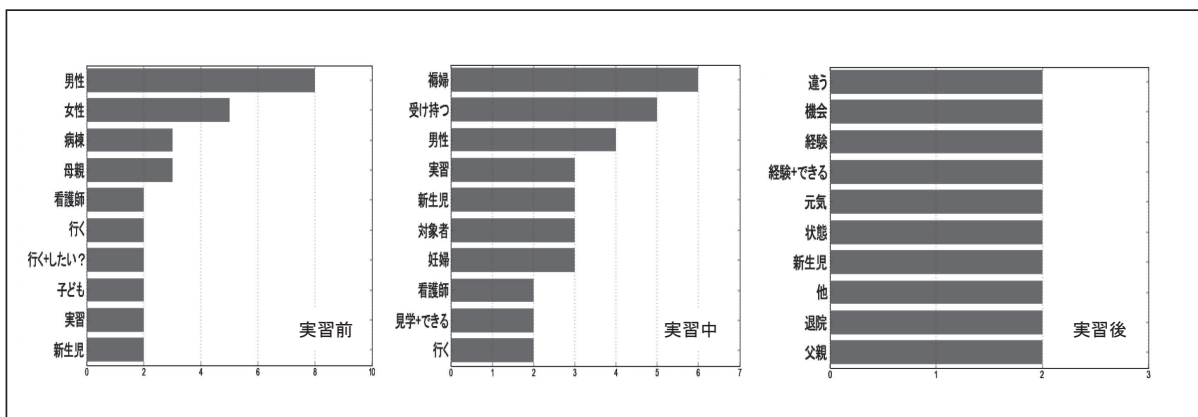


図1 単語頻度解析 病棟実習

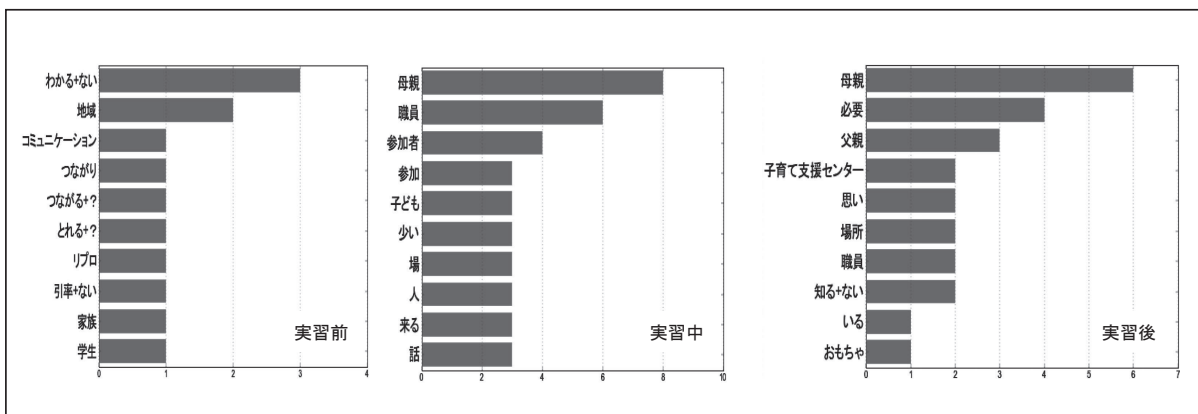


図2 単語頻度解析 子育て支援センター実習

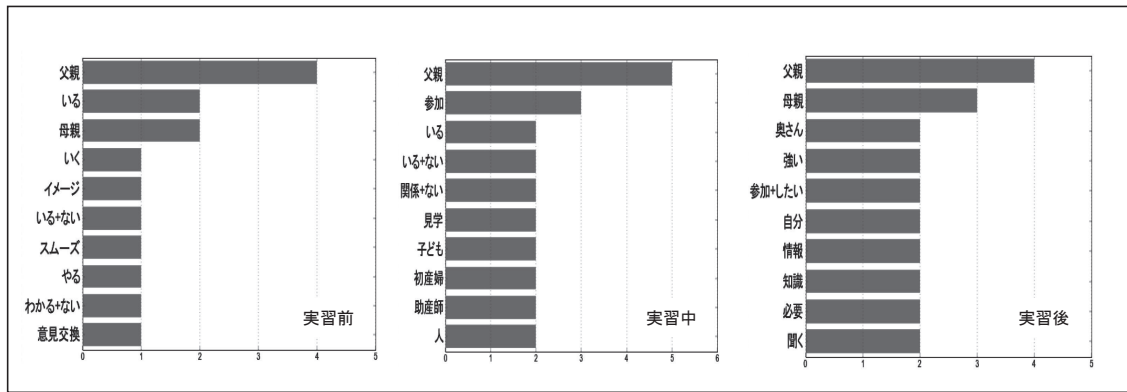


図3 単語頻度解析 パパママ教室実習

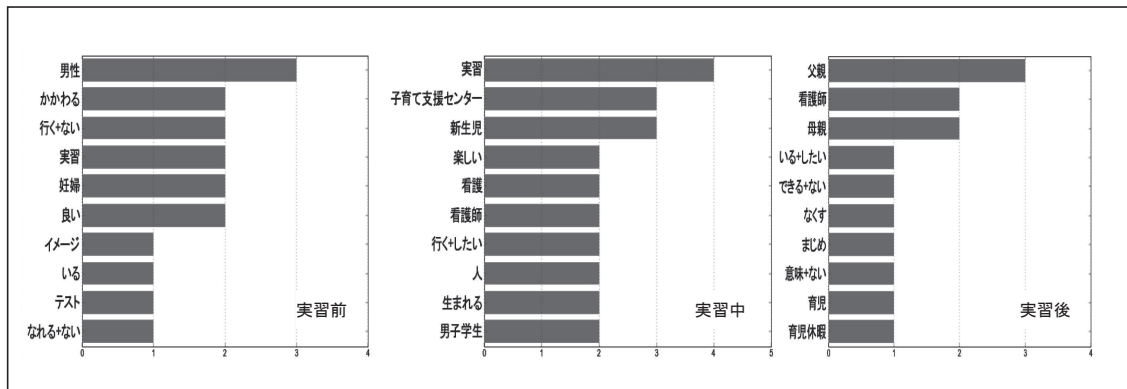


図4 単語頻度解析 実習全体

表1 特徴分析 特徴語抽出

	実習前	実習中	実習後
病棟実習	男性 女性 母親 病棟 行く+したい? 不安	褥婦 受け持つ 対象者 見学+できる 優しい 受け持つ+できない	違う 機会 経験+できる 役立つ 父親 経験
子育て支援センター実習	わかる+ない 地域 つながり コミュニケーション 家族	職員 場 参加者 育児 疑問 多様 理解+できる	必要 母親 父親 知る+ない 思い 場所
パパママ教室実習	父親 いる 母親 意見交換 わかる+ない 楽しい	関係+ない 見学 子ども 助産師 多い 知る+したい	奥さん 参加+したい 情報 知識 必要 話し
実習全体	男性 かかわる 良い 妊婦 行く+ない	新生児 子育て支援センター 楽しい 看護 生まれる 男子学生 行く+したい	父親 看護師 いる+したい 育児

注：太字は単語頻度解析では抽出されなかった単語

では抽出されなかった「多い」、「知る+したい」、実習後は、「話し」が抽出された(表1)。特徴表現抽出では、実習前は「父親-いる」、「場-わかる+ない」、「初産婦-わかる+ない」、「心構え-学ぶ」、実習中は「父親-参加」、「意見-聞く」、実習後は「母親-強い」、「アドバイス-もらう+できる」、「育児参加-必要」、「奥さん-付き添う」が抽出された(表2)。

4. 実習全体

実習全体については、実習前は「男性」、「かかわる」、「行く+ない」、「実習」、実習中は「実習」、「子育て支援センター」、「新生児」、「楽しい」、「看護」、「行く+したい」、実習後は「父親」、「看護師」、「母親」等が抽出された(図4)。

補完類似度を用いた特徴語抽出では、実習前、実習中、実習後すべてにおいて、単語頻度解析と同様の単語が抽出された(表1)。特徴表現抽出では、実習前は「場所-疎外感」、「男性-疎外感」、「実習-行く+したくない」、実習中は「新生児-看護」、「つながり-理解+できる」、「学生-必要」、「看護-経験+できる」、「観察-重要」、実習後は「まじめ-実習+したい」、「育児休暇-取る+したい」、「奥さん-接す」、「実習前-意味+ない」、「精神的サポート-必要」、「男性-支える」、「視点

表2 特徴分析 特徴表現抽出

	実習前	実習中	実習後
病棟実習	援助-不安 学習以前-入る 女性-嫌 不安-大きい 男性-かかわる+できない	褥婦-受け持つ 褥婦-受け持つ+できない 実習-行く 対象者-優しい	状態-退院 やりがい-必要 経験-役立つ 機会-良い 実習-比べる 高齢者-違う
子育て支援センター実習	コミュニケーション-とれる? 引率+ない-不安 学生-不安 雰囲気-わからない	疑問-感じる 疑問点-話す 母親-多い	孤立+しやすい-子育て中 育児ノイローゼ-可能性 育児参加-必要 子育て支援センター-必要 子育て-支える 職員-見守る
パパママ教室実習	父親-いる 場-わかる+ない 初産婦-わかる+ない 心構え-学ぶ	父親-参加 パパ-入る+ない 意見-聞く	母親-強い アドバイス-もらう+できる 育児参加-必要 奥さん-付き添う
実習全体	場所-疎外感 男性-疎外感 実習-行く+したくない	新生児-看護 つながり-理解+できる 学生-必要 看護-経験+できる 観察-重要	まじめ-実習+したい 育児休暇-取る+したい 奥さん-接す 実習前-意味+ない 精神的サポート-必要 男性-支える 視点-増える

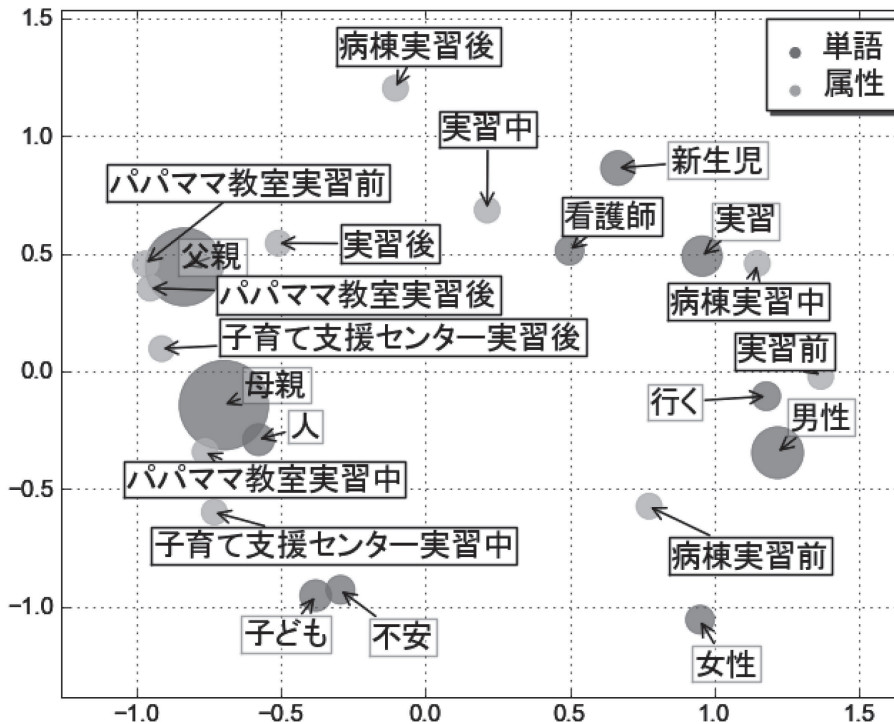


図5 対応バブル分析

「増える」が抽出された(表2)。

対応バブル分析では、病棟実習前、実習中は「女性」、
「男性」と距離が近く、病棟実習以外の実習は「母親」、「父
親」と距離が近かった。また、病棟実習前と病棟実習中
の距離は近く、他のものとは離れていた(図5)。

IV. 考察

1. 病棟実習

病棟実習では、実習前は「男性」、「女性」という単語
の出現頻度が高く、特徴語としても抽出されていること
や「女性」という単語は「病棟」という単語に共起され

ていること、「学習以前-入る」、「女性-嫌」、「男性-かかわる+できない」、「援助-不安」という特徴表現、対応バブル分析における「不安」との距離が近いことから、男子学生は女性特有の病棟での実習であるため、病棟に入ることや、男子学生が実習に参加しても、女性である対象者から承諾が得られず、対象者を受け持てないのではないかと、性差による不安を感じていると考えられる。

女性多数の環境に身を置くことやその環境にいる人々の受け入れに対する緊張・気まずさ・不安を知覚することが、男子学生が母性看護学実習において経験する性差に関わる困難の特徴のひとつとされている⁷⁾。

実習中は「褥婦」、「受け持つ」、「対象者」、「見学+できる」という単語の出現頻度が高く、特徴語としても抽出されていることや「褥婦-受け持つ」、「褥婦-受け持つ+できない」、「対象者-優しい」という特徴表現、「褥婦-受け持つ」、「受け持つ-できない」という注目語情報、対応バブル分析における「不安」との距離が実習前よりも実習中の方が離れていることから、対象者を受け持つことができた学生と受け持つことができなかった学生があったものの、いずれにしても見学は可能であり、褥婦や新生児といった対象者とかわる中でその優しさに触れ、実習前の不安は軽減されつつあるといえる。

実習後は「違う」、「経験+できる」、「機会」、「経験」、「父親」、「役立つ」という単語の出現頻度が高く、特徴語としても抽出されていることや「状態-退院」、「やりがい-必要」、「経験-役立つ」、「機会-良い」、「実習-比べる」、「高齢者-違う」という特徴表現から、健康な状態で退院していく褥婦や新生児の看護を他領域の実習と比べ、高齢者看護との違いを感じ、実習前のネガティブなイメージは、将来、学生自身が父親となったときに役立つ経験ができる良い機会であったというポジティブな思いに変化していると考えられる。

病棟実習において、かわりの中心となる「褥婦」という単語が実習中のみには抽出されていない。このことから、実習前は不安が大きく、学生自身の思いが中心となる傾向があり、実際に対象者にかかわることによって、対象者である褥婦へと思いが移っていくと考えられる。そして、褥婦、新生児とのかわりによって、実習後には褥婦を母親としてとらえていると考えられる。

2. 子育て支援センター実習

子育て支援センター実習について、実習前は「わかる+ない」、「地域」、「つながり」、「コミュニケーション」、「家族」という単語の出現頻度が高く、特徴語としても

抽出されていることや「雰囲気-わからない」、「コミュニケーション-とれる?」、「引率+ない-不安」、「学生-不安」、という特徴表現から、子育て支援センターについて、地域で行われているものであるがよくわからないという思いに加え、教員が引率しないため、学生だけでコミュニケーションがとれるのかという不安を感じていると考えられる。一方で、当実習において「家族」という単語が抽出されていることから、病棟実習でかわった褥婦や新生児から家族へと視野が拡大したと考えられる。

実習中は「職員」、「場」、「参加者」という単語の出現頻度が高く、特徴語としても抽出されていることや「育児」、「疑問」、「多様」、「理解+できる」という特徴語抽出や「疑問-感じる」、「疑問点-話す」、「母親-多い」という特徴表現から、学生の想像を超えた多数の参加者があり、多種多様な疑問点を話す母親と職員の対応を見ながら、参加している母親の思いに共感していると考えられる。

実習後は「必要」、「母親」、「父親」、「知る+ない」、「思い」、「場所」という単語の出現頻度が高く、特徴語としても抽出されていることや「孤立+しやすい-子育て中」、「育児ノイローゼ-可能性」、「育児参加-必要」、「子育て支援センター-必要」、「子育て-支える」、「職員-見守る」という特徴表現から、育児をする母親の思いを知り、それに応える職員と接することで、見守るという援助の重要性に気づき、子育て支援センターについて、子育てを支える必要な場ととらえるとともに、父親の育児参加の必要性も感じていると考えられる。

大学生の子育て広場体験において、学生にとって参加者とコミュニケーションをとることは難しいようであるが、好意的に話してくれるお母さんと子育ての苦労等、ただ世間話をするだけでなく、その会話から母親のたいへんさや悩みなどを感じとり、母親の様子に合わせてさりげなく声をかけたり配慮する職員の姿をとらえ、広場の意義へと考えを深めていく学生が多かった⁸⁾と報告されている。

3. パパママ教室実習

実習前は「父親」、「いる」、「母親」、「わかる+ない」、「意見交換」という単語の出現頻度が高く、特徴語としても抽出されていることや「楽しい」という単語が特徴語として抽出されていること、「父親-いる」、「場-わかる+ない」、「初産婦-わかる+ない」、「心構え-学ぶ」という特徴表現から、パパママ教室というクラス名から、母親のみでなく父親が参加すると考え、同性とのかかわ

りを楽しみにしていたようである。どのような場であるのか十分理解していないものの、初めてのことで戸惑うことが多い初産婦が心構えを学ぶために、意見交換をする場であると考えている。

実習中は「関係+ない」、「見学」、「子ども」、「助産師」という単語の出現頻度が高く、特徴語としても抽出されていることや「多い」、「知る+したい」という単語が特徴語として抽出されていること、「父親-参加」、「パパ-入る+ない」、「意見-聞く」という特徴表現から、期待していた父親の参加はなく、初産婦だけでなく子どもを連れて参加している経産婦が多かったことに意外性を感じたようである。そして、病棟以外で行う助産師の活動を見学することで助産師の業務の多様性を感じたと考えられる。

実習後は「奥さん」、「参加+したい」、「情報」、「知識」、「必要」という単語の出現頻度が高く、特徴語としても抽出されていることや「アドバイス-もらう+できる」、「奥さん-付き添う」、「育児参加-必要」、「母親-強い」という特徴表現から、知識や情報を得られる上、具体的なアドバイスをもらうことができるパパママ教室には、パートナーが妊婦となったときには、付き添って参加したいと考え、パパママ教室そのものに加えて、父親の育児参加の必要性も感じているといえる。また、子どもを連れて参加していた経産婦とかかわり、母親の強さを実感したようである。

4. 実習全体

実習前は「男子」、「妊婦」、「かかわる」、「良い」、「行く+ない」という単語の出現頻度が高く、特徴語としても抽出されていることや「場所-疎外感」、「男性-疎外感」、「実習-行く+したくない」という特徴表現から、男子学生は、母性看護学実習に対して、妊婦の承諾を得てかかわることができるのかと、病棟の特性や対象者との性差から疎外感を感じ、実習に行きたくないと消極的な姿勢で臨んでいると考えられる。

実習中は「新生児」、「生まれる」、「看護」、「子育て支援センター」、「楽しい」、「男子学生」、「行く+したい」という単語の出現頻度が高く、特徴語としても抽出されていることや「看護-経験+できる」、「新生児-看護」、「観察-重要」、「つながり-理解+できる」、「学生-必要」という特徴表現から、新生児の看護や子育て支援センター実習を通して、観察の重要性を学び、妊娠・分娩・産褥・育児を一連の流れとしてとらえることができていると考えられる。実習前は行きたくないと考えていた母性看護学実習を楽しいと感じ、将来勤務することがない

男子学生にとっても必要な学習ととらえているといえる。

実習後は「父親」、「育児」、「いる+したい」、「看護師」という単語の出現頻度が高く、特徴語としても抽出されていることや「育児休暇-取る+したい」、「精神的サポート-必要」、「奥さん-接す」、「男性-支える」、「視点-増える」、「実習前-意味+ない」、「まじめ-実習+したい」という特徴表現から、看護の視点が増えたことを実感し、実習前には意味がないと思っていた母性看護学実習を肯定的にとらえると同時に、育児休暇を取って、パートナーを精神的にサポートするといった父親としての将来像を深く洞察しているといえる。男子学生は女子学生に比べて、夫やパートナーとして自分を置き換える傾向が高い⁹⁾といわれている。

女子学生が2週間の病棟実習のみであるのに対して、男子学生は、パパママ教室実習で妊娠期の看護を学び、病棟実習においては、産褥期及び新生児期の看護を学ぶ。そして、子育て支援センター実習において、育児や家族の看護を学ぶことで、妊娠・分娩・産褥・育児のつながりを理解することができていると考えられる。病棟実習だけでなく、子育て支援センター実習やパパママ教室実習を行ったことで、マタニティサイクルだけにとらわれず、次世代を育む過程にある母子ならびにその家族を広くとらえて学修する結果になっていた。

看護学生の母性看護学実習に対する意識調査では、男子学生には、母性看護学は周産期にある人だけを対象にするものではなく、女性のライフサイクル、女性をとりまく環境をも対象にする看護であることを納得し、将来配属されることのない職場だからこそ、学生の時に学びたいと思える実習を工夫する必要性が提案されている¹⁰⁾。臨地実習における男子学生特有のストレスアとして、女性教員が男子学生の立場や心情を理解してくれないことが指摘されている¹¹⁾。そして学生は、「男子であるためサポートしてほしい」と母性看護学実習で教員に望んでいる¹²⁾。今回の調査では、教員のかかわりが最も重要となる病棟実習において「教員」という単語は抽出されていない。しかし、子育て支援センター実習において、教員の引率がないことに学生は不安を感じていることから、学生は教員のかかわりを必要としているといえる。したがって教員は、実習前、実習中、実習後と変化する学生の思いをくみ取り、その変化に応じたかかわりをすることによって、実習前の不安の軽減を図るとともに、男子学生の学習意欲を引き出すサポートが求められる。

V. 結論

母性看護学実習について、男子学生は、実習前は性差による疎外感から不安を抱え、実習参加に消極的であるが、実際に対象者とかかわることにより、実習を楽しいと感じ、不安は軽減していくと考えられる。そして、実習前は意味がないと感じていた母性看護学実習を学生にとって必要な経験ととらえるとともに、学生自身の父親像を思い描いていた。

また、病棟実習、子育て支援センター実習、パパママ教室実習という3施設での実習を行うことにより、妊娠・分娩・産褥・育児のつながりを理解することができ、男子学生の学びを深める結果となっていた。

今回の研究では、母性看護学実習に対する男子学生の思いを明らかにすることで、A大学で行っている母性看護学実習の展開方法は、次世代を育む過程にある母子ならびにその家族を広くとらえた学修につながり、男子学生の学びを深めるとともに、父性の促進にもつながっていることが示唆された。

研究の限界と課題

本研究では、対象者が9名と少数であるが、分析可能なデータの確保はできたと考える。しかし、面接において意見表明をしてもらえない学生のための調査であることから、看護系大学の学生全般にあてはまるものとは言い難い。今後は、さらに対象者の数を増やすと同時に、母性や父性の発達にも着目した調査を行い、母性看護学実習を看護学の学びの場とするだけでなく、父性の発達にもつながるよう取り組んでいきたい。

(謝辞)

本研究をまとめるにあたり、男子学生の実習を快く受け入れて下さいました実習施設の皆様、対象者の皆様に感謝いたします。そして、本研究にご協力いただきました学生に感謝いたします。

本研究は、第54回日本母性衛生学会の報告内容を加筆修正したものである。

文献

- 1) 日本看護協会編：看護白書平成24年版，209，日本看護協会出版会，東京，2012.
- 2) 日本看護協会出版会厚生省健康政策局看護課看護問題研究会：看護関係統計資料集，74，日本看護協会出版会，東京，2012.
- 3) 三宅順，近藤大貴，奥山真由美：男子看護学生に特有の臨地実習におけるストレスサーと対処行動，第40回看護教育，30-32，2009.
- 4) 菊水淳：男子学生が母性看護学実習を行う意義とは，看護教育，47（4），360-361，2006.
- 5) 服部兼敏：看護の言葉をテキストマイニングする，看護研究，46（5），462-474，2013.
- 6) 服部兼敏：テキストマイニングで広がる看護の世界，142-144，ナカニシヤ出版，京都，2010.
- 7) 荒川直子：母性看護学実習において男子学生が経験する性差に関わる困難，第38回看護教育，123-125，2007.
- 8) 谷向みつえ：子育て広場における臨床心理学実習の実践報告—大学生の親性教育の試みについて—，総合福祉科学研究，創刊号，243-248，2010.
- 9) 萩山優子：母性看護学実習で分娩に立ち会った看護学生の性差による認知の特徴についての分析，第41回母性看護，43-45，2010.
- 10) 野田貴代，都竹友季子，出口睦雄：看護学生の母性看護学実習に対する意識調査（第6報），愛知きわみ短期大学紀要，7，29-38，2011.
- 11) 三宅，他：前掲注1），30-32.
- 12) 都竹友季子，野田貴代，出口睦雄：看護学生の母性看護学実習に対する意識調査（第3報）—母性看護学実習に対する男女の意識の違いと母性意識の高まる指導的関わりについて—，愛知きわみ看護短期大学紀要，6，7-13，2010.